

飛驒高山へ行こうと思いついたのは、今から三年前のことだ。当初の目的は、飛驒福来心理学研究所を訪問することであった。その研究所は、高山市出身の福来友吉博士(東京大学心理学助教授に在職中に念写や透視の研究をして大学退職を余儀なくされ、後に高野山大学教授に就任)の業績を内外に知らせる目的で、地元の山本健造氏が設立したものである。2016年6月4日、研究所所長の山本貴美子女史(山本氏の弟子であり奥様)と所員の大場宏明氏が車でJR飛驒国府駅に出迎えてくれた。研究所は高山市北部の国府町にあり、附属の福来記念・山本資料館には福来博士や山本氏の業績を紹介するパネルや念写の写真、念写に使用した鉛管などの実験道具が展示されていた。資料館の直ぐ近くには鳥居のある小振りな天孫宮が建立されていた。

女史の話では、人体科学会の創設者である湯浅泰雄教授(古今東西の思想に精通した哲学者)が小田晋教授(精神医学の権威、マスコミは宇宙人扱い)や竹本忠雄教授(アンドレ・マルロー研究家、酔うと日本の歌謡曲を即興の仏語で歌う)など筑波大学の同僚を連れて当研究所を何度も訪問され、文字通り鎧兜を脱いで歓談されたとのことである。酒が入ると、あの謹厳な湯浅教授の人格が入れ替わった如く陽気になったという。勤務先の筑波大学内では、念写や透視のような異端的な研究話は、昔も今もまず無理だろう。アウトサイダーは、黙って孤独に耐えるのが宿命だ。超能力者にして六次元弁証法の提唱者・山本氏は70才を超えた或る日、乗鞍岳の山奥にある丹生川村の旗鉾分校で教員をしていた若き頃の記憶を突如思い出し、その地方の語り部翁(若田仁太郎)から見込まれて特別に伝授された口伝の真偽を確かめるべく、7年ほどの歳月を費やして実地調査したのであった。その口伝(飛驒の口碑と呼ばれる)と実地調査の結果を山本氏が独特の構想力で繋ぎ合わせて記した書物が、『鞍ヶ根風土記』である。それ以降、山本健造氏ならびに山本貴美子女史による日本古代史関連の著作が、福来出版から矢継ぎ早に刊行された。『明らかにされた神武以前』『日本起源の謎を解く』『暴かれた古代史』『日本のルーツ飛驒』『裏古事記』(最後の二冊は漫画)等である。その概要を取りまとめる時間的余裕はないので、イワクラ研究家・平津豊氏の調査報告「謎の古代飛驒国」から、口碑を要約したものを、やや長文だが引用しておこう。ご関心なき向きは、読み飛ばされたし。(実は、ここが本当は面白い。)

「大昔、日本は、海から顔を出した淡山(乗鞍岳)であり、命の源である丹生の池に写る太陽や月やを眺めて心を静めていた。これを日抱御魂鎮(ヒダキミタマシズメ)という。「ひだ」という地名の由来である。

寒冷化が進むと乗鞍岳から飛驒の地に下山して暮らすようになった。

2500年前に神通力に優れた大淡上方様(オオアワノウワカタサマ)が現れ、飛驒の国を治めた。それより15代後の淡上方様(アワノウワカタサマ)は、子供である位山命に皇統命(スメラミコト)の尊称を与えた。淡上方様は外国から守るために各地に子孫を住ませた。大淡上方様の次男の山下住水分奇力命(ヤマノシタズミクマリクシキチカラノミコト)は西に行きその子孫が大三島の大山祇命(オオヤマヅミノミコト)である。大淡上方様の長男である山本住日高日抱奇力命(ヤマモトズミヒダカヒダキクシキチカラノミコト)の子孫である山本高山土公命(ヤマモトタカヤマツチノキミノミコト)は、伊勢の鈴鹿に行き、その子孫が猿田彦命である。

淡上方様が崩御されると位山の頂上に岩を運んで皇祖岩(スメラノオヤイワ)とし、その横に埋葬した。以後、皇統命が位に就く時には、位山のイチイの木で辞命が下るようになった。また、皇統命が亡くなると皇祖岩の横に埋葬していった。34代の伊弉那岐命(イザナギノミコト)は出雲から来られた那美命(ナミミコト)と結婚し、ヒルメムチ命(後の天照大神)を産む。弟の素戔嗚命(スサノオノミコト)は、飛驒を出奔して母の国である出雲に行ってしまう。

35代の天照大神は飛驒の分家である山下家の思兼命(オモイカネノミコト)と結婚し、5男3女をもうける。素戔嗚命は、草薙剣を天照大神に差出し、飛驒政権と出雲政権が仲良くしていくために、天照大神の三人の娘を素戔嗚命の三人の息子の嫁にやり、天照大神の一人の息子を素戔嗚命の娘の婿にやる話がまとまった。これが誓約(ウケイ)の真実である。

このようにして多紀理姫(タギリヒメ)が大国主命に嫁いで、阿遲志貴命(アジスキノミコト)と下照姫(シタテルヒメ)が産まれるが、大国主命は他国の姫を追い求めて多紀理姫に寄りつかなくなる。とうとう正妻である多紀理姫をさしおき、須勢理姫(スセリヒメ)を正妻にすると言い出した。素戔嗚命が大国主に試練を与える物語は、大国主が飛驒王国への裏切り行為を行なおうとしているのを、素戔嗚命が制止しようとしたものである。さらに素戔嗚命の娘と結婚するために出雲に使われていた天照大神の息子の熊野久須毘命(クマノクスビノミコト)が突然、原因不明に死亡する。

ここに、天照大神と素戔嗚命の約束は破られ、多紀理姫は飛驒に逃げ帰ることになる。

天照大神は、出雲に軍隊を派遣し、国譲りを迫る。出雲政権は、戦力的にも文化的にも飛驒政権に勝てる見込みがないので、たちまち降伏した。大国主を幽閉する御殿は飛驒の大工が造り、見張り役として天照大神の息子の穂日命(ホヒノミコト)が派遣された。

また、筑紫に外国人が渡来して勢力を増やしていることに対し、天照大神は、三人の娘を偵察に派遣した。このとき鈴鹿の猿田彦命が筑紫に案内した。

その頃、飛驒にも大雪が降るようになったので、国の中心を大和に移すことにし、近畿に人々を派遣する。天照大神の息子の日子根命(ヒコネノミコト)は滋賀を開拓し、彦根という地名になった。邇邇芸命(ニニギハヤヒノミコト)の兄である饒速日命(ニギハヤヒノミコト)は河内を開拓した。

三姫が帰ってきて筑紫の状況を報告すると、今度は、邇邇芸命が大勢の人々を連れて筑紫に派遣される。これが天孫降臨である。このときも猿田彦命が道案内をする。

筑紫を平定した後、邇邇芸命の孫であるサヌ命(神武天皇)が大和に凱旋するが、この時、既に大和を開拓していた饒速日命との戦いが起こり、サヌ命の兄である五瀬命が戦死する。そのうち、お互い同族であることがわかり、天照大神の指示通り、サヌ命が大和で都を開くことになる。誤解であったとはいえ、五瀬命を戦死させてしまった長髓彦は罰せられるが、饒速日命は、妻の兄を殺すことはできないので、斬ったことにして、長髓彦を東北に逃がした。

この朗報は天照大神が眠る位山に報告され、位山のイチイの木で作られた位板(クライイタ)がサヌ命に授けられた。今なお、天皇の即位式には位山のイチイの木で作った笏木が献上されている。

一方、国譲りをさせられた出雲は、穂日命を殺し、出雲神道を全国に広めることで、飛驒に復讐を始める。饒速日命を祀っていた大和の三輪神社をはじめ、数々の有力神社をのっとり勢力を伸ばしていく。出雲

神道になびかない飛驒の人々をヒエッタ、エッタ、エタと呼んで差別した。倭姫が八咫の鏡を持って地方を点々と逃げまわったのも出雲神道に奪われそうになったからである。これが飛驒に伝わる口伝である。」

さて、いかがだろうか。神武天皇(大和朝廷)以前に飛驒王朝が既に先在しており、天孫降臨は気候の寒冷化に伴う高地から低地へ(飛驒から大和へ)の民族移動であり、天照大神も素戔嗚命も大国主命もみんな歴史上の人物で、天孫系神社の祭神を出雲系の祭神が乗っ取ったという話である。神話と歴史の関係をどのように捉えるかで、見方が異なってくる。天孫降臨や神々の振舞いを、文字通り神代(幽り世)の出来事と捉えたり、宇宙規模での天体移住(例えば、金星から地球へ)の話と見ることも可能であるし、天照大神や素戔嗚命などの神々を歴史上の人物に必ずしも限局する必要はない。というよりも、我々自身が、神性(幽り身)と人性(顕し身)という意味での両性具有と考える方が真相に近いかもしれない。それゆえ、天照大神は、地球を照らす太陽神であると同時に、オオヒルメノムチという尊称が与えられた歴史上の女性でもあるわけだ。それにしても、飛驒の口碑は、古事記や日本書紀などの正統視された書物には記されていない内容なので、ぶつとんでいのように思うに違いない。それはもっともな感想である。しかし、歴史書に記されていることは、あくまでも勝者の歴史であって、敗者の歴史は抹殺されるのが普通であることを考慮すれば、あながち否定もできまい。『鞍ヶ根風土記』は、語り部翁の口伝と実地調査結果が山本氏自身の史的構想力の中で渾然と融合しており、どこまでが口伝で、どこからが氏の見解か見定めがたい難点を含んでいるが、なかなか興味深い伝承・史実の解釈ではある。今回の飛驒高山の訪問は、その真偽を確かめるための手掛かりを得ることも動機の一つであった。

2019年10月30日昼過ぎに、ワイドビューひだ25号で JR 高山駅に着き、駅近にある宿泊先のホテル周辺をぶらっと散策。飛驒高山まちの博物館で高山城主・金森氏六代の城作りや治政、飛驒の匠の道具、円空仏などを見学し、古い町並みの近くで夕食をとった後、今回の探訪で全面的にお世話になる荻原哲郎氏に連絡を入れた。相談の結果、翌日に東部の乗鞍岳山麓方面へ、翌々日に南部の位山に登ることに決めた。元・中外日報の記者・荻原氏は、高山市在住のフリーライターで、宗教界や精神世界に関する情報や知識は半端なく広くて深い。のみならず、自身も宗教的霊性を開発すべくその種の実践行を積み重ねてこられ、位山周辺を巡る行者達の言動には厳しい眼を持っておられる。この探訪の案内役としては、これ以上望めない、天の差配としか思えぬほどの最適任者である。神社仏閣、縄文遺跡など、関心がある場所を車で案内していただいたばかりか、第一の目的である位山登山にも同行していただいた。タクシーをチャーターしても、登山まで付き合ってくれる物好きな運転手などいまい。ホテルには三日間の連泊をしたのだが、予想以上の好天に恵まれた。雨が降ると、登山は断念となるので、この機会を逃さぬよう、10月30日～11月1日の予約を入れた上に、念のため別のホテルにも少しずらした日程で予約を入れておいたのだが、天気心配は全くの杞憂であった。天象気象を司る神様は、我々を見捨てず、三泊四日、高山は見事なまでに晴れ渡った。気に入りのロイヤルブルーの登山服は、20年前の富士登山の際に着用したゴアテックス製だが、いいものは何年経っても着られる。シューズも、高山の街に軽快な靴音を響かせた。天の時(天候)、地の利(高山)、人の和(我々)、この三つが揃った。

10月31日午前9時、宿泊ホテルに荻原氏が車で迎えに来てくれた。この日、探訪するのは、千光寺、幾つかの日抱宮(現在の社名は伊太祁會神社、)、それに日輪神社である。千光寺への道は、平坦な道

路の途中から急に険しい山道になった。朝靄かすむ山道は、高野山へ上る山道に似て、急なカーブが暫く続く。聞けば、檀家は多くなく、しかも交通の便は余り良くないようだ。駅前からタクシーに乗るか、団体ならばバスを借りるしかないとのこと。予想していた以上に山奥深く入り込んだ山腹に切り開かれた寺院である。眼下の平野は朝靄が包み込んで、ほぼ見えない状態である。ここが飛驒の高野山とも呼ばれている理由の一端は、この地形にある。千光寺は、開山が両面宿禰、開基が真如親王(平城天皇の第三皇子、空海の十大弟子の一人、老年に入唐求法を志し異国で薨去)とされる高野山真言宗の古刹である。現在の大法師住職は、以前より葬儀の在り方、死の^{デス・エデュケーション}教育やスピリチュアルケアにご関心が強く、医療機関と連携した活動など実践して来られた方である。また、山内に国際平和瞑想センターが開設されたばかりで、たまたま訪れた朝の時間帯は、七年に一度の本尊御開帳の法要が始まったところであった。寺僧が三人列をなし、読経しながらバザラホール(金剛堂)のある瞑想センターへ消えて行った。拝観料を納めて山内の円空仏寺宝館に入る。円空は江戸前期に活躍した美濃出身の修験僧・仏師・歌人で、生涯に12万体的な仏像を作ったと言われる。日本各地でその土地の木材を活用した荒削りで素朴な仏像は、当館にも64体が展示されているが、何といても圧巻は、両面宿禰像である。意外にも小さい。(前日、まちの博物館で見た円空仏、たとえば金剛神像二体などは、優に二メートルを超える大作であった。)前後両面にあるとされる二つの顔が並列して彫られているのが、いかにも奇妙である。奇妙なのだが、なぜか仏像全体が慈愛溢れる温かさを醸し出している。千光寺の開山・両面宿禰は、日本書紀では「顔が二つ、手が四本、足が四本」ある怪物として描かれており、仁徳天皇の御代に武振熊命によって討伐されたと記されているが、飛驒や美濃では、「すくな様」と呼ばれて崇拜されていたという。大和朝廷には抵抗する地方豪族の首領と映ったが、地元では霊力を具有する英雄として超人伝説が残されており、近辺には宿禰様の修行跡も幾つかあるらしい。この飛驒の「すくな様」は、出雲の「すくなひこな様」との繋がりはないのか、という疑念が湧く。一方、「えんく(円空)様」も地元の人気は頗る高く、疾風怒濤の勢いで仏像を彫りながら仏法弘通に努め、荻原氏の説明では、死の三年前より一切の仏像彫りを止め、五穀断ちの千日行を続ける祈りの日々を送り、64歳の時に、「母親を水害で奪った長良川の河畔に掘った土室で人々の苦しみを背負うような形で入定」したという壮絶な逸話を残している。飛驒と美濃の地域的霊性は、この「すくな様」と「えんく様」の二人が特異な形で代表しているように思われた。



円空作 金剛神像 (まちの博物館)



飛驒千光寺の国際平和瞑想センター

山内の樹林眼下に秋の雲海
水澄みて円空仏の鑿の跡

次に向かったのは、上原清二氏らによって、日本のピラミッドとして一躍その名を知られるようになった日輪神社である。現地に来れば一目瞭然だが、御神体は背後の山、つまり神奈備山である。山容は今でも綺麗なピラミッド型をしており、神社のその裏山に踏み入って暫く登ると、縄が張られた禁足地になっていた。手前に転がる岩は、何らかの祭祀に関係したもののだろうか。アマチュアの好事家が無断で立ち入って、かなり荒らされたのだろう。日本のピラミッドとは、方位石や鏡石などの巨石を配置した神殿であり、神々(宇宙人)と人間(天孫降臨民族)が交信を行なった場所とされている。フランスのヴァレーン博士などは、古代エジプトの大巨石文化を生んだ文化的根源が地球上のどこかにあると探し求めて、ついに飛騨高山の位山に辿り着いたと言われる。ピラミッドは、権力者の墳墓などではなく、太古と現在、宇宙と地球が交流しうるような、我々が忘却した聖なる通信基地・祭場なのであろう。巨石を運ぶのも、肉体の労力によるものではありえず、重力を相殺するような何らかの未知の力(といっても太古の人は知っている)を利用してははずである。人も巨石も空を飛んだ時代を、我々は記憶喪失しているのではないか。およそ、祭りとは、神界(幽り世)と現界(顕し世)の関係調整であるが、神界と現界の双方を貫いて生きていることを忘却しがちなために、この両界の周期的な関係調整が不可欠となるのである。

地図で見ると、道は平らに続くように思われるが、結構険しい山道を車で登る。前輪駆動の車でしか登れないほど急な坂道が、至るところで待ち構えている。次に向かったのは、伊太祁曾神社と称される、所謂「日抱宮」である。前述の山本氏の調査では、日抱宮は昔はこの地方に三十数社あったが、今では十九社しか残っていない。これらの社では、その名のとおり、日抱の御魂鎮という神事が行なわれていたのである。社近くの池の周りを村人たちが車座になって取り囲み、池の水面に映る太陽や月を眺めながら心を鎮め、大自然や先祖に感謝しながら人々の平和と幸福を祈ったという。極めて素朴で不思議な神事であるが、それはありうるのではないかという思いがあり、この探訪で、神事の原因や痕跡のようなものを探してみたいと気になっていた。祭神は日抱尊、つまり五十猛命(素戔鳴命の子、大国主命の子とも言われる)だが、山本氏は昔の天孫系から出雲系の五十猛命へと祭神が乗っ取られたと主張する。伊太祁(=五十猛)+曾(新羅国の曾戸茂梨、つまり新羅国・曾の五十猛を祭る神社という解釈である。事の真偽は定かではない。綿密な調査と古文書解読が不可欠であろう。素人考えでは、「伊太祁曾」の名称は、元は「ひだ・きそ」に宛てた漢字で、地理的にも飛騨(日抱、日田、肥田など)と木曾が分ち難く地域文化圏を形成していた古き時代の名残りのようにも思ってしまう。紀伊国一宮は伊太祁曾神社であり、木の種を日本中に植えたという植林の功績が五十猛命に帰せられている。それはともかく、果たして、日抱の御魂鎮の神事は、現実に行なわれていたのだろうか。往古の神事は、細々と伝承されてきたはずである。その記憶は、神事を司る直系と傍系とを問わず、子孫の記憶からいまにも消えかけている。日抱宮(伊太祁曾神社)を三社ほど回った。そのうちの一社には、巨大な榎の木が屹立していた。また別の一社の道を挟んだ向かい側に酒屋を営む女将と出会った。荻原氏の祖父が乗鞍岳山麓に住んでいたためか、この辺り一帯の諸事情は妙に詳しい。荻原氏は、その女将と何やら親しそうに話をしている。互いに共通の知り合いがいるのが分かったのだろう。立ち話がすぐに終りそうもなく、二人に近づいて適当に相槌を打ち、時に

話に加わった。何でも、その女将は、上方様(若田家)の傍系子孫に当たるとのことであった。そんな人物とここでたまたま会おうとは、合縁奇縁である。眼の前のお宮の横(奥)には、現在は埋まって雑草場になっているが、確かに丹生池があったという。そこでどんな神事が繰り広げられたのか、今となっては空想の彼方である。その女将に「貴方の顔は見たことがある」と言われて、面食らった。当方は女将に見覚えはない。もう一つの旗鉾伊太祁曾神社には、神功皇后が淡郡(乗鞍岳)の神の御告げによって三韓征伐を無事終えた戦勝記念に、旗鉾を当社に納めたという伝承がある。また、近年では、江戸時代の文化八年に伊勢の皇太神宮が当社に飛来されたとの噂が立ち、一日に二千人もの参拝者が押し寄せ、旗二五〇本、額十九枚、剣二十本などが当社に奉納されたという。些か肩すかしを食らった感があるが、ここには日抱の御魂鎮の名残は見当たりそうになかった。乗鞍岳のさらに山奥には伝説の大丹生池があるらしいが、冠雪で危険なため見送った。

栃の木の巨大に坐す奥社かな
一位なる木の実の赤き山の宮
古池の語り部住みし飛驒晩秋

時間に余裕があったので、位山の正規の登山ルートを少し登った所にある祭壇岩まで行くことにした。まずは水無神社に赴き、登山の許可を願う御参拝をする。水無神社は、飛驒一宮であるが、その別当職は千光寺住職が務めている。天皇の即位式の際に一位の木で作った笏木(辞令の位板)を献上するのは、この水無神社なのである。また、熱田神宮にある三種の神器の一つ、草薙の剣が戦時中の混乱期に一時避難していたという、皇室ゆかりの神社である。水無神社は位山を御神体と言われるが、位山に向かう方位がずれているため、その説には疑問符が付く。境内の一角には水無神社の元・宮司、島崎正樹を顕彰した大きな石碑が据えられている。島崎正樹は、文豪島崎藤村の父で、小説『夜明け前』の主人公である。「平田国学の人として維新の運動に身を挺し、のち皇政復古の志もむなしく、この里で多くの歌をものされた」とある。正樹の和歌「きのふけふ しぐれの雨ともみち葉と あらそひふれる 山もとの里」が、石碑に刻まれている。

まだ時間は午後二時で、西日は十分に明るく強烈である。モンデウス(神の山)飛驒位山スノーパーク(冬はスキー場、夏は牧場)のあるところに、正規の「位山登山道」の入口(標高 910m)がある。翌日登る予定のルートは、ダナ平林道を車で20~30分ほど登り、車が十数台は置ける空き地の登山口(1,330m)から登る「巨石群登山道」である。正規のルートから位山の頂上(1,529m)まで登れば、優に片道3時間にかかるようだ。今登るのは、その登山口よりほんの 100mほど高い山腹にある祭壇岩である。辺り一面、すすき野が広がる。これほどすすきが繁茂している高原は、今まで歩いた覚えがない。人の背丈を超えるほど伸びたすすき野が広がっている。水が湧き出ているのか、雨が降ったのか、足元が濡れている場所もある。すすきの穂を掻き分けて20分ほど登ると、三本の木立が目印の古代祭祀跡である祭壇岩に着いた。平らに削られた大きな岩板の上に小さな岩板が置かれている。この形状は、沖縄・与那国島の海底遺跡にある祭壇岩と同じらしい。そこで、五井昌久先生の言霊入りのテープで、眼を閉じて世界平和の祈りをする。このテープは8分半の長さなので(短いのか、長いのか?)便利である。涼風が身体を駆け抜け、すすきが一斉にそよぐ。日はまだ高いが、それでもやや傾きかけた気配で、軟らかな日差しにも感じる。

後ろを振り向くと、遙か遠くに槍ヶ岳、穂高連山、乗鞍岳など北アルプスの連峰が横一列に並んでいる。こんな壮観な絶景の風光の中で、世界平和の祈りができるとは。眼を閉じた祈りの最中に、背後から狩衣のような白衣に冠を被った古代人の一行が何か担いで山道を登って来くるのが一瞬よぎった。緋袴も混じっている。白昼夢か。祈り終わると、そこは祭壇岩。何事もなく涼風がすすき野を吹き抜けていた。



位山登山口より頂上を仰ぐ



位山中腹の祭壇岩

すすき野の祭祀の岩根風わたる

次の日(11月1日)も快晴であった。いよいよ位山頂上の「天の岩戸」を目指す日だ。午前9時、前日同様に荻原氏がホテルまで車で迎えに来てくれた。この旅では、車なしでは何事もできない。9時40分頃に巨石群登山道入口の鳥居前に着いた。左手には位山探訪案内図の看板が立ち、さらにその左手には太陽神殿へ昇る階段がある。そこには都竹峰仙氏が精魂を傾けて造った位山御神体の天照日之大神像が安置された球体の至聖所を方形台が支える石造の神殿が建立されている。偶然にも、この日は位山開きの記念日らしい。太古のピラミッドと言われる位山を昭和二九年に開いたのは、金井白雲(京都御苑内の白雲神社で天啓を受けた女性行者)、都竹峰仙、湯原富治の三氏であるということだ。斎藤秀雄先生の『靈験巡講記』に出てくる位山の記事は、都竹峰仙氏に焦点が当たっているが、金井女史側と縁のあった荻原氏は、位山開きの経緯には都竹氏側とは異なる見方を持っているようである。そもそも、山自体が一つの大宇宙であるから、山開きとは、ある意味で宇宙開闢に等しい創業である。鉱物も植物も動物も人間も全て含めて生きとし生けるもの、ありとあらゆるものを生息せしめる一山の(95%の幽り世と5%の顕し世に跨る)生命磁場を自己の生命磁場に共鳴・共振させながら、すっぽりと包摂するための行法の実践が不可欠であろう。いわば、場所の自己限定としての個物が逆に場所それ自体になるような絶後蘇生の宗教体験、生命を賭した創業なのだ。

位山では時々、熊が出るという物騒な話を聞いていた。位山登山の計画を立てている時に、熊が襲いかかる映像が脳裏をかすめることもあったので、これも保険と思って、熊除けベルと熊除け(催涙)スプレーを用意しておいた。ここからの登山道は、最初はかなり急な上り坂が続く。落ち葉で靴が滑りやすく、不規則な段差の足の踏み場もゴツゴツして悪い。おまけに、リュックを背負っているため、重心の位置が普

段とは違う。リュックに付けた熊除けベルの澄み切った音が、カランカランと心地よく響いた。やや耳が遠く、高音が聞き取りにくいので、当方にはほどよく鳴り響いていたが、荻原氏には五月蠅^{うるせ}かったかもしれない。熊が出る危険性もあるので、これも仕方がない。何しろ、熊の好物である熊笹が至る所に繁茂している。命には代えられない。少し登った頃から、次々と巨石が眼前に現われた。禊岩、御門岩、日抱岩、臙岩、光岩、豊雲岩、鞍ノ岩、餅ノ岩、八重雲岩、蔵立岩、そして天の岩戸と続いた。誰が名付けたか知らぬが、その名前を記した木の札がそれぞれの岩の前に立っている。巨石群というだけあって、とてつもなく巨大な岩だ。鞍ノ岩の何と巨大なことか。磐船(宇宙船)と呼びたいような岩もある。いったい、誰が運んだのか。誰が巨石を飛ばしたのか。登っていると気付かぬが、この巨石群が地図上では、高低の差はあれ、北西から南東(頂上)へほぼ一列に並んでいるのも不思議である。磐座に強い関心を持つ荻原氏を真似て、自分も巨石を手で触れてエネルギーを感じてみる。ほのかな温かみのある、どこか懐かしい感触で、すうっと一体化する。アニメ「もののけ姫」の原像が、ここにはある。ありとあらゆるものの中で、たぶん鉱物は最も純粋な形で宇宙の生命エネルギーを蓄えているものに違いない。生命エネルギーが流入している点では、動植物や人間も同じだが、鉱物はそれが最も純粋に(ということは、エネルギーが感情想念で混濁することなく)、しかも形として(幾何学的な形体で)蓄積されているように感じられる。宝石の結晶などその典型だろう。たいてい、巨石は苔むし、樹木や草の根が中に割り込んでおり、まるで生き物である。鉱物と植物が共生する大宇宙だ。よく見ると、幾何学的な直線や渦巻き^{渦巻}の如きものが刻まれているものもある。これらの線刻は、その一つ一つが意味を帯びており、磁石の針が北極を示したり、ぐるぐると回転したりするように、その都度その都度の指針か、あるいは宇宙開闢の道筋を刻む暗号なのか。次から次に現れる巨石は、これでもかこれでもかと有無を言わず、天啓を黙示しているかの如く鎮座している。こちらは、それをただ黙って受け入れるのみだ。これら巨石群は、位山に据えられた、エネルギーを蓄電・放電するチャクラか経脈のようにも思えた。登山の途中には、急に視界が開けて、北アルプスの連山が遠望できる場所があった。



位山登山道入口(右手の鳥居より)



御門岩



光岩(確かに光っている)



豊雲岩



乗鞍岳眺望スポットより



「天の岩戸」の前で

一時間ほど登って、ようやく「天の岩戸」に辿り着いた。この岩にも、何十本もの樹木の根が割り込んでおり、古色蒼然たる生き物の観がする。飛騨の口碑要約を再び引けば、「淡上方様が崩御されると位山の頂上に岩を運んで皇祖岩(スメラノオヤイワ)とし、その横に埋葬した。以後、皇統命が位に就く時には、位山のイチイの木の板で辞令が下るようになった。また、皇統命が亡くなると皇祖岩の横に埋葬していった」という、正にその場所である。大きな岩の間に挟まれて小さな祠がある。天照大神を始めとして、皇統命(天皇)のご先祖を祀る墓石もこの辺にあるに違いない。天の岩戸という天と地の交流点で、こんどは我即神也、人類即神也、神聖復活という三種の印を組み、世界平和の祈りをする。天地人の三才が交わる祈りである。やや離れた所に位山山頂があった。樹木が生い茂って、展望広場もあるが、見晴らしは良くない。案内がいなければ、きっと樹林に迷うだろう。不思議なことに、山頂付近に繁る樹木の枝は、みんな上に伸びずに、横へ伸びている。さらに不思議なことには、この山頂には山中(地下)から自然に水が吸い上げられた「天の泉」という名の湧き水がある。そのご神水を有り難くいただく。富士山を火の山だとすれば、位山は水の山であり、両者が揃って神(火水)となる。山頂標識のすぐ近くには、ピラミッド型の小岩

などがあり、人工的な線刻も見られた。この辺りで何人かの登山者とスレ違い、挨拶を交わした。山頂付近には40分ほどいただろうか。その後、我々は急ぎ足で下山した。登山は上りよりも下りが要注意と言われる。普段使わない筋肉を使う上に、下りの方が足を滑らす危険が増す。幸いにも、この登山で尻餅をつくことは一度もなかった。まだまだ元気な証拠だと自信を深める。なお、位山の南方23kmには金山巨石群がある。こちらには精緻を極めた驚愕の古代天体観測装置があるそうだ。

秋晴れや熊除け鈴の音と登る
秋天の直線曲線巨石群
おのおのの秋寂ぶ巨石群に触れ
秋空の巖のみあれ位山
秋麗ら天の岩戸に清水湧く
登山道の靴跡踏めば濡れ落ち葉
秋晴れの山中他界を巡り来ぬ

我々の探訪の旅も、クライマックスを無事に過ぎ、まもなく終りに近づく。最後の訪問先は、堂之上遺跡である。目指すは、JR 久々野駅からそう遠くない高台の縄文遺跡である。現在は、久々野歴史民俗資料館の管理下にある。職員らしき老人が一人草刈り作業をしていたので、呼び止めて、見学したい旨伝えると、あっさり「どうぞ」と言われた。入館は無料。何とも牧歌的である。この時期、ちょうど「高山市の縄文時代 土器・土偶・石器」の企画展をしていた。展示されていたのは、丹生川、清見、朝日、久々野、国府など広く高山市一帯の出土品である。縄文土器は概して素朴な造形で模様も単純である。このような縄文土器からは、高度な精神文明を思い浮かべることが難しい。展示パネルには、長野や諏訪など先進地域からの影響を受けたようなことが記されている。山本健造氏が力説するところの凸型の石冠や凹型の御物石も展示されていた。資料館の外には、43軒の縄文住居跡の敷地に、復元された茅葺きの竪穴住居が建っている。この高台は、川の氾濫にも堪えられ、眼前に聳える秀麗な船山を遥拝できる絶好の生活場である。



堂之上遺跡



御物石器

縄文時代は、今から1万6千年ほど前から3千年前までの期間を指す。展示品や復元された縄文住居を見ている限り、どうも一昔前までの未開で粗野な縄文時代観が色濃く反映されているように思えてならない。堂之上遺跡は5千年ほど前のものと推定されているが、悠久の時の流れからすれば、ついこの前のことだ。本当に縄文人の生活がこれほど単純で素朴であったのか。単純な生活文化と高度な精神文明、縄文人に見出せる、この「単純」と「高度」の二つが、どうもしっくりと一つに結像しない。フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンは、物質文明の隆盛後に^{ラ・ヴィ・サンブル}単純な生活(la vie simple)が来ることを予見したが、「単純」と「高度」は、ぐるぐると螺旋状に位相を高め(深め)ながら周期的にメビウスの環のように一つに結び付いているのだろうか。飛驒王朝は、果たして夢か現つか、幻か。今回の探訪だけでは、確かな結論は下せない。ただ、その幾つかの痕跡から、微かな響きを幻聴したような気がしている。

純朴な縄文山都の秋夕焼け

(完)

2019/11/12